

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

学園の檻

転任女教師佐由理

小説 水坂 早希

挿絵 B—RIVER

| | | |
|-----|---------|-----|
| 序章 | | 006 |
| 第一章 | 女教師佐由理 | 024 |
| 第二章 | 赴任初日 | 032 |
| 第三章 | 暗雲 | 065 |
| 第四章 | 羞恥責め | 102 |
| 第五章 | 終わらない陵辱 | 151 |
| 第六章 | 崩壊 | 197 |
| 終章 | | 247 |

登場人物紹介

Characters



いちじょう きゆり
一条 佐由理

様々な特殊能力を持つ女教師。一条家の令嬢でもある。

しんじょう あやか
新城 彩花

佐由理が担当するクラスの女子生徒。学園のヒロイン的存在。

いちのせ ななみ
市ノ瀬 七海

彩花の親友。レズっ気のあるボーイッシュな美少女。

あくつ はやと
阿久津 隼人

クラスを仕切っている不良。彩花の幼なじみ。

やがみ れい
八神 零

特殊能力を持つ男子生徒。自分の力を悪用する。

第四章 羞恥責め

次の日の早朝。佐由理は管理を担当している美術準備室に一人こもり、置いてあるソファに腰かけ、窓からさす朝焼けに目を細めて思案に暮れていた。

教師が生徒の脅しに屈するわけにはいかない。気丈にも出勤してきた佐由理だったが、今日、これから八神になにをされるのかと考えると、やはり不安をこらえきれなかった。

そのやさしげな外見と反して、八神がどれほどの恐ろしい力と歪んだ性格を持っているのかは、すでに知っている。昨日、味わわされた羞恥絶頂を思い出すだけでも顔から火が出そうなのだ。今日もあんな目に遭わされてしまうのだろうか。

それこそ、身も心もどろどろになるまで何度でも……。

身体の奥がうすら寒くなって、黒髪の女教師は背筋を震わせた。

とにかく、全力で対処するしかなかった。八神がなにを企んでいるのかは定かではないが、即、警察沙汰になるような、あからさまに破廉恥な行為はやってこないだろう。

まだなにも起きていないので警察には連絡できないが、もしも佐由理の手に負えない事態になったときは、電話で救難信号を送ればいいだけだ。

そして八神を捕まえることができれば、とりあえず先の事件は解決するのだ。

突然、美術準備室の扉が開いた。顔を見せた華奢な少年は八神だった。揺れる金髪の下で鳶色の冷眼が光っている。いきなりにこりと笑われて、佐由理の心臓が跳ねた。

すでに彼に対して苦手意識を抱えている自分に気づいて、女教師は唇を噛んだ。

「おはよう、佐由理先生。逃げずに来たみたいだね。……それとも、昨日みたいに虐められたくて来たのかな？」

昨日の痴態が浮かんで美貌の教師は内心で赤面したが、外見では平静を装った。

「……おはよう八神君。あなたがなにを考えているのかは知らないけど、あまりやりすぎると尻尾をつかまれるわよ？」

佐由理はソファに座ったまま、八神の顔色を探るように見た。

「まさか。そんなドジはしないよ」

にやりと邪気をはらませて笑う金髪の生徒に、女教師は切れ長の目をすつと細めた。

「……それは、あなたが、あの事件の主犯格だって認めてること？」

「ふふっ。さあね。先生のことは色々調べてあるよ。警察と連動してこの学園に赴任してきた、凄腕の女教師だってね。……そうだ。彩花のことは聞いたよ」

いきなり話題を変えられた。

「隼人の様子が変わったから、問いただしてやったら白状したよ。ムカついたから、彩花を襲ったやつら全員、ボコボコにしてやるうかと思っただけど、隼人が先にやっちゃったか

らな。それにもう警察に捕まってるんじゃないね。……まあ、彩花も災難だったね。あとで事件の記憶を消してやるよ」

佐由理は色々な意味で驚いた。

「……八神君、やっぱり記憶消去能力を持ってたのね。……それで、本当に彩花さんの記憶を消してもらえるの？」

「ああ。彩花はかわいい幼なじみだからな。……さて。そろそろ本題に入ろうか」

佐由理は意外に思った。八神のような人物でも幼なじみは大切なのだろうか。

僅かながら八神を見直した女教師だったが、次の言葉に戦慄した。

「……先生が出ていったあとで、マンションから彩花を拉致させてもらった。いまからオレの仲間、三十人がかりで陵辱するよ」

「……え？」

佐由理は冗談だと思った。

「いまはまだ無事だよ。部屋の外からオレが能力を放って、神経にシヨックを与えて眠らせたからね。まだ眠ったまま、拉致されたことにも気づいてないはずだよ。それに仲間たちはオレに忠実だからね。オレが合図するまで、彩花に手を出さやつなんていないよ」

八神の顔に底冷えがするような冷笑が浮かんでいるのを見て、慄然となった。

……いま彼が告げた話は、冗談ではなく本当のことなのだ。佐由理の唇が震えた。

「……なにを考へてるの？　あなた、彩花さんの幼なじみなんですよ？」

「心配はいらないよ。彩花の記憶はあとでまとめて消してやるから。……でも、ショックが癒えないうちに三十人だからね。記憶を消してもだめなほど、心が壊れちゃうかもね」

カッとなって美貌の教師は立ち上がった。押しとどめるように八神が指を一本立てた。「一つだけ、先生が彩花を助ける手があるよ。……先生が彩花に憑依してやるんだ。そうすれば、彩花の意識を眠らせたままにできるだろ」

思いも寄らぬ提案に、佐由理は呆氣に取られた。だが、そんなことをしてしまえば……。先生の憑依能力の全貌は、昨日見抜いたよ。面白い能力だね。なにより最高なのが、憑依した体の感覚まで受け取ってしまうことだ」

そうなのだ。彩花に憑依すれば、陵辱される感覚まで佐由理が受け取ってしまうのだ。八神がなにを考へているのかわかり、すうつと美人教師の背筋が冷えていった。

「つまり、今日一日憑依を続けたまま、授業をやってくればいいんだよ。先生の身体には手を出さない。全部の授業が終わったら、彩花を解放して記憶を消してやるよ。彩花の身体についた『多少の傷』は、先生が治癒能力で治してやれば一件落着だろ？」

『多少の傷』とは、彩花の『処女』のことを指しているのだと理解して、急にあの猫目の美少女が陵辱される現実をリアルに感じた。そして、彼女に憑依したならば、そのおぞましい陵辱を実際に受けるのは佐由理になるのだ。

震えそうな心を叱咤して、美貌の教師は金髪の生徒を睨んだ。

八神は、佐由理の怯える内心を見抜いたように一つ笑うと、ポケットから薄型の四角い機械を出した。手のひらに乗るほどの携帯テレビだ。二つ折りにされた機械を彼が開けると、小さな画面には、後ろ手に縛られて転がされた制服姿の少女が映っていた。

「——彩花さん！」

映像の彩花はまだ眠っていた。彼女の周囲は薄暗く、どこかの室内だとしかわからない。「さあ、早いとこ彩花に憑依したほうがいいよ。もうすぐ目を覚ますだろうからね。監禁場所はここから一キロ圏内だ。見知った霊になら、これだけ離れていても憑依できるんですよ？ それから、先生が気絶しても、一人だけなら憑依したままでいられるんだよね？」

自分の能力を綿密に知られてしまっている事実には、佐由理は唇を噛んだ。

画面中の彩花が、身じろぎしたのを見て焦った。迷っている暇はなかった。いまは八神の言う通りにするしかない。脳の下垂体中心部。そこにあふれている白い光をちぎり、彩花の霊質を思い浮かべてやる。彼女の霊質へと引かれるように、白い波の固まりが佐由理の頭を離れ、教室を抜け、猫目の美少女の監禁場所へと一瞬で飛んでいった。

※

彩花に憑依した佐由理は、重く閉じている猫目をゆっくりと開けた。

後ろ手に黒いベルト状の手枷で拘束され、両足首も同じ拘束具がつけられている。着衣

に乱れはなく、身体にも違和感を感じないので、本当にまだなにもされていないだろう。佐由理が用意した私服やパジャマではなく、ブレザーの制服を着ているのは、おそらく彩花は心痛を振り払って学園に行こうとしていたのだろう。傷心の女子生徒の葛藤を思いやり、女教師は胸が痛くなった。

拘束された小さな身体を捻り、周囲を冷静に観察する。

部屋が薄暗いため全容は見渡せないが、空気の流れからかなり広い空間なことがわかる。人の気配はなく、ぼつりとプロジェクターが置かれている。放射状に伸びる光砂を追って、壁の大きなスクリーンを見つけた瞬間、はっとした。

そこには、美術準備室にいる佐由理の姿を、斜め上から捉えた映像が映っていたのだ。

※

佐由理は準備室にいる本体で天井を見た。天井の火災報知器が、昨日までのものとは微妙に変わっていた。歴戦の女教師には、それが隠しカメラだとわかった。

「カメラに気づいたみたいだね。先生の行動を見張れるように、昨夜のうちに学園内のいたるところに設置しておいたんだ」

あまりに大がかりな膳立てに驚いている暇はなかった。八神の鳶色の瞳が紫に染まる。いきなり彩花のほうの意識が途切れ、佐由理は驚いた。憑依が解かれてしまったのだ。

「……ちよっと、八神君！ あなたがやったの？」

「まあね。結構、簡単に切れるもんだね」

笑っている八神が手にした画面の中で、美少女が虚ろな猫目を開けている。

女教師は焦った。憑依して臉を開けた影響で、彩花はもう気がついていいるのだ。

佐由理は即座に憑依し直そうとしたが、なぜか脳下垂体に灯る白光が動かなかった。

「憑依できないだろ？ 先生の身体を巡る能力波を操ってやってるからね。これは、自己より力が低い能力者に対してなら、簡単にできる技だよ。ちよつとコツがいるけどね」

テレビの中の少女は、放心した顔を左右に巡らせ始めている。佐由理は狼狽した。いまの彩花は、拉致された現実を受け止めるだけで、強いショックを受けてしまうだろう。

「そんなことはいいから、はやく憑依させて！ 彩花さんが気がついちゃう！」

ふつりと八神の抑制が消えた。佐由理はようやく、彩花に憑依し直すことができた。

女教師はホッと息をついた。短い時間だったので、少女に気がつかれてはいないだろう。

「これでわかっただろ？ オレには先生の能力を自由に制御できるんだ。こんなふうだね」

八神の能力波が黒髪の教師を包んだ。特殊能力を生む源である能力波の、ほとんどが停滞してしまったのを佐由理は感じた。

「先生の能力をすべて封じた。彩花以外に憑依することもできないよ。先生にできるのは、彩花に憑依を継続することだけだ。これで、先生は丸裸だね」

「……くっ」

八神の言う通り、佐由理は能力波をピクリとも動かせなくなった。身体の波を操れないということは、先日、不良にさわられたときのように触覚神経を遮断することもできない。つまり、これからは普通の女性のように愛撫を感じ取ってしまうのだ。

女教師は、自分の身体が恐ろしく敏感なことは、数少ない自慰から知っていた。彩花はどうだろうか？ もし、佐由理ほどではないにしても敏感な身体を持っていたとしたら？

まさに丸裸にされてしまった感触がして、黒髪の教師は喉をこくりと鳴らした。

「先生は、この学園では美術担当だけど、ほとんどの教科を受け持てるんだろ？ 学園長に頼んで、今日は我がクラスの授業を全部やってもらうことにしたからね。今日一日、担任と生徒で親睦を深めたい、なんて理由をつけたら簡単にOKしてくれたよ」

八神の名前と恐怖を使えば難しいことではないだろう。女教師は啞然としてしまった。これで佐由理は、今日一日、自分のクラスの生徒の前で見せ物にされてしまうわけだ。

「学園中にあるカメラの映像は、この携帯テレビでも受信できるからね。今日一日、先生の言動は見張ってるよ。カメラから外れたらそのつど『伝心』で教えてあげるから、隠れちゃだめだよ。それから、先生がこのことを誰かに話そうとしたら、逃げようとしたら、遠慮なく憑依を切るからね。そうしたら彩花がどうなるか……は、わかるよね？」

八神が邪悪そうに笑った。もはや八神が何歳も年下の生徒だということも、佐由理が二十六歳にもなる教師だということも関係ない。目の前で冷笑するこの華奢にも見える少年

を前に、美貌の女教師は戦慄を覚えた。

……それでも、まだ逃げ道はある。彩花が拉致された以上、もうすでに警察が介入できる事件に発展しているのだ。八神の目を盗んでこっそりと、警察に連絡すればいいだけだ。だが、佐由理の行動はカメラで見張られているのだ。八神に知られずにそんなことができないのだろうか？ 彩花を救出する前に憑依が解かれてしまったら終わりなのに。

「いまからオレの命令は絶対だからね。逆らったら憑依を解くよ。ま、そんなに無理な命令はしないから大丈夫だ。とりあえず、授業だけは逃げるなつてことだけだね。……それからね。オレが能力で固定してるから、もう先生の意思では、彩花への憑依を解くことはできないよ。これから先生にできるのは、徹底的に陵辱される快感に耐えながら、授業をすることだけだ。あ、あと、念のために携帯電話は預からせてもらおうよ」

もう佐由理は、なにも言い返すことができなかった。

「それじゃ、ゲーム開始だ。まずは朝礼、がんばってね」

乾いた笑いを残して、八神が美術準備室を出ていった。

緊張がふつりと切れ、佐由理の膝が落ちた。ソファーにばふりと座つてしまう。

額から、どろりと汗がにじんだ。美貌の女教師はなおも、打開策があるはずだと信じて考えてみたが、気ばかりが焦るだけでなにも思いつかなかった。これから始まるだろう陵辱羞恥責めを考えると、タイトスカートから伸びる美脚の震えが止まらなかった。

※

人の氣配を感じ、彩花に憑依した佐由理は閉じていた猫目を上げた。

急に明かりが灯り、目が眩む。部屋の全貌が明らかになった。教室二つ分はある大きな部屋だ。床一面には黒い耐水性のレザーが張られ、布団の上にいるような感触がする。

続々と部屋に入ってくる少年たちは、いずれも粗暴そうな外見をしており、八神の話通り三十人はいる。少年たちはにやにやと好色な笑みを浮かべ、部屋の中央で正座する獲物を取り囲んだ。美少女教師は肩までの髪を揺らし、少年たちをきつく睨み回した。

「……あなたたち、うちの学園の生徒じゃないわね？」

佐由理は威圧した声を発したつもりだったが、彩花の鈴の音のようなかわいい声質では、まるで迫力がない。その、勇ましい口調と声質のギャップに少年たちが笑った。

「はは。八神の言った通りだな。ほんとに学園の先生の憑依してんのかよ」

「佐由理先生だっけな？ そんなかわいい姿で凄んでも、怖くないぜ？」

少年たちの言う通りだった。三十人の男に囲まれた中で、両手両足を拘束されたか弱そうな美少女が凄んでも滑稽なだけだ。猫目の教師は小さな唇を引き結んだ。

「それじゃあ、さっそく始めるか」

後ろ手にされた拘束具に、天井から伸びた鎖がカチリとかかった。

「——なにをする気？」

「言わなくても、八神から説明受けてんだろ？ いまから先生をいたぶってやるんだよ」
天井の滑車が回り、鎖が巻かれた。美少女の小さな身体が引き上げられる。

「……ちよ、ちよっと！」

いきなり、つま先立ちにされて佐由理は焦った。後ろ手を引く拘束具は、内側がソフトな材質になっているため、痛みはほとんどない。続いて、足首の拘束具が外された。猫目の教師は、黒のニーソックスだけ履いた足を揺らして渾身の力で抵抗したが、四人がかりで押さえつけられてしまった。彩花のか弱い脚力ではどうしようもない。鉄棒の両端についた拘束具を、膝につけられてしまう。足が肩幅以上に開かれた羞恥の状態で閉じられなくなり、佐由理はいきなり精神的に追い詰められた。

少年たちはいずれも佐由理より何歳も若く、社会経験も未熟だ。本来の彼女ならば理論でも腕力でも軽くあしらえるのだが、この状態ではなす術がない。なにより、彩花の小さな身体に憑依していると、自分がちっぽけな獲物でしかないことを、否応なしに感じさせられてしまうのだ。全身を舐める三十人の好色な視線が、佐由理の心を浸食していく。

「……は、はなしなさいよ」

「じゃあ、まずは上半身から剥くか」

少年たちがナイフを抜いた。前後左右からナイフが伸び、みるみる制服が切り取られる。裂け目を入られたブレザーやブラウスが、八方から伸びる手にむしり取られていく。

「や、やめなさい……あなたたち！」

生地がはぎ取られるたびに、佐由理は加速度的に心細くなっていった。開脚した膝を揺らして身体をくねらせる美少女教師を、少年たちが嘲笑した。ついにピンク色の形よく膨らむブラジャーが露わになる。上半身の制服が残っているのは腕の部分だけになった。

「……ああっ」

「とりあえず、最初のお披露目だな」

両肩と後ろの紐が切られた。前から伸びてきた手にブラジャーをはぎ取られてしまう。ふるりと、白い形のよい乳房が露わになった。ツンと上を向く小さな乳首から、薄い桃色の乳輪が清楚に染み広がっている。少年たちはその美乳ぶりに下卑た声を上げた。

「いやっ！」

ひやりとした冷氣とともに羞恥が肌を突き刺し、猫目の教師はうつむいた。滑稽なほど小さい朱桃色の乳首が目飛びこんでくる。彩花の乳房は形こそいいが、豊満すぎる女教師から見れば、いかにも未熟で恥ずかしい代物だった。佐由理の中学一年生頃の大きさしかない。当時、乳首が異様に小さかったところまで似ている。

自分の胸でないのはわかっている。だが、彩花のすべての感覚を受け取っている身では、佐由理は、中学一年生に戻った自分が未熟な乳房を見られている錯覚がしてしまうのだ。

「……うあ……やあ」

白い頬を染めた美少女教師は、羞恥で潤み出す猫目を見られまいと臉を閉じた。

「へえ。先生、自分の身体じゃなくても恥ずかしいのかよ？」

「おもしろいな。じゃあ、もつと恥ずかしくしてやるよ」

いきなり、背後から両胸を鷲づかみにされた。少女の顎がひくりと上向く。

「……ふあっ！ あ……や、やめなさい……よ」

劇感で毛先が震え、鎖骨を撫でた。最初の愛撫だけで佐由理は絶望的な思いに駆られた。恐れていた通り彩花は、熟れ誇る女教師に勝るとも劣らない敏感な身体を持っていたのだ。少年の指が二つの膨らみを淫猥に揉みしだいていく。けっして乱暴な愛撫ではなく、女を追い詰めることを最優先にした手練の責めだった。少年の十本指が乳房の柔和さを満喫するべく、開き、閉じ、さすり、こすり、節足動物のように蠢いていく。

教え子と同年代の少年に乳房をじかに蹂躪される行為は、佐由理の身が壊れるほどの、おぞましく屈辱的な仕打ちだった。だが、そんな負の感覚を押し流すほどの波が、身体の奥からじわりと湧いてくる。揉まれこねられる胸から波紋状に体温が上がっていく。

「くああっ！ や、やめなさい……いよ……いや！ もう、やめて！」

「へえ、胸だけでそんなに感じるんだ。おい。面白いからみんなで翫ってやろうぜ？」

嘲笑とともに全方位から無数とも思える手が伸びてきた。美少女教師は猫目を見開いた。

「——いやあああっ！」

少女の全身、スカート部分以外のすべての肌を、三十人の少年の蠢く手がまんべんなく覆った。開脚足枷でハの字に広がるすなりとした足を、無数の指がはいまわる。足枷の内側にある膝裏に指が入る。つま先立ちで悶え震える足の裏がニーソックス越しにくすぐられていく。足の指の間すべてに五指がめりこんでいく。

「……ひっ！ く、くすぐった……い。……くああっ！」

快感とおぞましさに力が抜け、それでも振り乱れる腹を無数の指が撫で回してくる。踊るへその外輪を周回しながら、指がやさしく突き入れられる。すでに揉みほぐされ、淫猥に形状を変える乳房にさらに指が殺到していく。ついには二つの小乳首にも五本ずつの指の腹が張りつき、乳輪を巻き添えにしてクリュクリュと左右回転と上下動を始める。

「い……たっ……。……くあああっ！ やめっ……やめて！」

閉じ合わされた両脇の下へ人差し指が差し入れられ、無毛の陰唇をいたぶるように付け根を食いこませ、愛液をねだるように前後動をする。振り乱される肩までの髪を指ですき、うなじを愛でられる。首筋から顎まで羽毛の指使いで撫で上げられ、すでに真っ赤になった耳たぶを揉みほぐし、両耳へやんわりと指が挿入されていく。

「くううっ！ ひうっ……ひうっ！」

ほぼ全身を責め立てられる苛烈な愛撫に、佐由理の強靱な理性がみるみる氷解させられていく。凄まじいおぞましさに、くすぐったさ、痛み、かゆみ。それらを押し流すほどの官

能の波が身体の芯で生まれ、全身の隅々へと放出され始める。体温が一気に上昇し、頬が際限なく熱くなつていく。唐突に、快感の支流が胸の頂点で噴火した。

「……ひっ！ ひたっ！ いたいっ！」

突然叫び、少女は真つ赤な顔で髪を振り乱した。あまりにも強烈な勃起に、小さすぎる乳首の皮膚が伸びきってしまったのだ。ちよこんと起立した小乳首をさらに責め立てるべく、血液がなおも流れこんでくる。葡萄の粒のように真ん丸と育った乳首が、鼓動に合わせて躍動している。その一打ちごとに乳首の皮膚が伸ばされ、微小な乳腺までもが拡張されていく。延々と敏感な器官をつねられるような劇感に、美少女は激しく身を揺らした。

「……いた……い！ ……いやあああっっ！」

その取り乱しように少年たちは驚いて、即座に全員が手を離した。少年たちは八神に、佐由理を責める際は、彩花の身体を必要以上に傷つけないように厳命されているのだ。

「……なんだよ、先生。そんなに乱暴にしてねえだろ？」

「……む、胸！ 胸があっ！」

猫目を潤ませてわななく美少女が、患部を示すように胸を突き出した。赤くぷくりと膨らんだ乳首が、なおも体積を広げようと躍動しているのを見て、少年たちもようやく理解した。失笑が広がる。愛撫が止んだ影響で我に返った佐由理は、とたんに羞恥に襲われた。

「すげえ立ち方だな。剥けたクリトリスみてえだぜ？ 先生」

「へっ。ビクビク震えてやがる。乳首突き出して、そんなにさわってほしいのかよ？」

「こりゃあ、揉みほぐして柔らかくしねえとだめだな」

揉みほぐすと聞いて、美少女が震えた。受け取るだろう劇感を想像するだけで怖かった。

「……そ、そんなことは、やめて……ちようだい……」

「俺たちは、先生のために言ってるんだぜ？ 乳首がほぐれるまでひねりまくってやるよ」

三十人の指が再度、耳へ、首筋へ、脇へ、腹へ、へそへ、太腿へ、足の裏へ伸びる。

「……ひっ！ や……やあつ！ 大勢で颯られるのは、もういやあああつ！」

尻を除いた全身への愛撫とともに、胸への新たな責めが始まった。乳房のすそをかき集めるように揉み、牛の乳を搾るように先端へと手のひらをしごいていくのだ。硬くしこつた小乳首がなおも硬化し、はちきれんばかりに真ん丸と肥え太っていく。

「……んんっ……ひうあつ！ ……胸の先……胸の先があ！」

まさに、激痛と快感が乳房の頂点に凝縮して、佐由理の意識が混濁した。全身を揉み、さすり、くすぐり蠢く無数の指。周囲から突起部へとキュッキュッと丹念な搾乳が繰り返される。ついにあれほど未熟だった彩花の乳首が、熟女のそれと見違えるほど大きく、淫猥に成長させられてしまった。美少女教師の開いたままになった口端から唾液が垂れた。

「……こん……なのって」

肥大した乳首が、まさにむき身の陰核のように危険なほど敏感になっていくのがわかる。

腫れた乳首が空気に撫でられただけで、少女の腰の髓がガクガクと激しく震えた。

「さあ、泣き叫べよ、先生」

上下左右にと揺れ逃げる二つの乳首に少年の指が伸びる。なにをされるのか悟り、猫目の教師は少年に悲痛そうな顔で懇願してしまった。

「や……めな……い。……やめ、……やあつ！ やめてえっ！」

容赦なく膨らみが摘まれた。拘束具をジャラジャラと鳴らし、少女の腰が蠢動した。

「くあああああああつ！」

弱くタッチされただけで佐由理は軽く達してしまっただが、なおも乳首は解放されなかった。公言通り、『柔らかくなるまで採みほぐす』べく、十本の指が蹂躪を開始する。こんもりと膨らんだ桃色の乳輪を振動させた手のひらでなぞり、はちきれんばかりに躍動する乳首を、親、中、葉、子の四指で摘んでこすりあわせてやる。潰されて身を伸ばした乳首の頭頂部に開く乳腺に、人差し指の頭を捻りこませていく。つねり、こすり、つぶす。

「ひうっ、ひうっ。……うわっ……ふあっ……はなして……はなしてえ！ 胸だめえ！」

ついには指を使って、乳首が男根のように激しく上下にしごきたてられ始める。羞恥と快感で朱色に染まった白い肌が、ぞわりと総毛立つ。佐由理の脳裏が一瞬で白濁した。

「……ひ、ひっ……。いやあああああああああああつ！」

少女の身体がびくびくと魚のように跳ねる。まだ股間すら責めていないうちに、あから



さまざまな絶頂を披露した美少女教師を見て、少年たちが何度目かの下卑た笑いを上げた。

飛翔していた精神が戻り、荒い息をついて鎖にだらりと脱力する猫目の女教師は、止めどない羞恥に襲われた。昨日に引き続き、年下の少年によって公衆の面前で、無理矢理に絶頂を味わわされてしまったのだ。まだ、陵辱は始まったばかりだというのに。

佐由理は二十六歳という年齢も忘れ、大声で泣き出したい気分になっていた。

※

「……お願い。みんなもうやめて……乳首、さわらないで……」

「……先生。……一条先生！ 大丈夫ですか？」

朦朧としていた佐由理本体の意識が戻った。ここは体育館だ。まだ朝礼の真つ最中であり、女教師は壁際の定位置に立っていた。隣りにいた若い男性教師が、心配そうに同僚の顔をのぞきこんでいる。佐由理は、恥ずかしい言葉を無意識に本体でつぶやいてしまったことに気づいて、真つ赤になった。微かな声だったので、聞かれてはいないだろう。

閉じ合わせた美脚を震わせ、長い睫をわななかせながらも気丈に笑い返した。

「……あ……はい。だ、大丈夫です」

「……本当に大丈夫ですか？ 凄い汗ですよ？ 顔色も悪いですし……」

大丈夫なわけがない。いま美貌の教師は、股間部分を除いた全身を三十人の指で觸られている劇感を受け取っているのだ。佐由理の本体にも火が入り、白いブラウスにレース地

を押し映すブラジャーの内側では、すでに乳首が硬くしこり立っている。

黒髪の教師は手にしたハンカチで額の汗を拭いた。心臓が早鐘のように打っており、白い頬にどうしても乙女のような恥じらいの朱色が浮かんでしまう。もはや唇を引き結んでいなければ、あられもない声を上げてしまっただろう。

潤んだ漆色の瞳を恐る恐る上げると、前を向く生徒の中で唯一、佐由理を見ている鳶色の目があった。八神だ。にやりと笑っている。女教師は奥歯を噛みしめた。

まだだ。まだ負けたわけではない。どれだけ憑依体で痴態を演じようと、本体である佐由理が毅然と振る舞ってみせればいいだけなのだ。

ついに、朝礼での山場がきた。佐由理は今日、『生徒指導の在り方』という題目で演説をする予定になっているのだ。学園長に名前を呼ばれ、女教師は平静を装った返事をした。一步目を繰り出すと、シヨーツの奥がくちゆりと粘り、ページュのタイトスカートから伸びる美脚が震えた。それでも佐由理はうつむきそうになる顔を上げ、腰まである黒髪を艶やかになびかせながら颯爽と歩いてみせた。……と、突然、叫びそうになった。

彩花の身体に残っていたスカートがはぎ取られたのだ。女教師が動き出した映像を見た少年たちが、ここぞとばかりに本格的な蹂躪を開始したようだった。シヨーツも容赦なく引き裂かれ、恥丘が露わにされる。佐由理は羞恥に耐えきれなくなり、ついに彩花の憑依体に回っていた理性をすべて放棄して、本体のフォローに専念することにした。

とたんに、憑依体が叫びを上げる。

『……いやああああああつ！ 恥ずかしい……見ないでよおお！』

彩花の声だが、確かに佐由理の心が発している叫びだった。理性とともに大人の誇りをも捨て去ってしまった、まさしく少女の叫びだ。あまりに幼稚な叫びに羞恥を煽られる。女教師が舞台正面の階段に足をかけたとき、憑依体の恥丘が後ろから押し上げられた。

『ひうううううつ！』

階段を陰唇で後押しされて上っているような、屈辱的な錯覚がする。二歩目は割れ目を前から後ろへ撫でられ、三歩目は陰核に中指をねじこまれた。佐由理は背筋をひくひくと震わせながらもなんとか耐え、頬を真っ赤にして舞台上がり演壇についた。

※

佐由理の演説が始まるとともに、彩花の陰唇への蹂躪が始まった。

「……との考えをもって、私はいままでも生徒指導にあたってきました。この学園でも……」

体育館に佐由理の美声が朗々と響く。額にびっしりと玉のような汗をかき、頬に恥じらいを浮かべながらも、場慣れした女教師の演説にはまるでよどみがなかった。

だが彩花の恥丘は、陰唇を両手で摘まれ、赤桃色の羽根を蝶の標本のように淫猥に伸ばし広げられていた。後ろから伸びる生暖かい舌が皺の年輪を隅々まで撫で、ドーナツ状の

処女膜の穴へ優しく挿入される。少年の舌が処女膜内壁で回転し、愛液がじゅるじゅると貪り吸われていく。あまりのおぞましさに、演説をする佐由理の背筋が総毛立った。皮を剥かれ、にゆるんとはじけ出た白い未熟な陰核へ、前から新たな唇が密着する。

「……つまり、私の先の事件に対する見解は……はあっ！」

ちゅうと、むき身の陰核を吸われ、佐由理は腰の髓を叩かれたような劇感に襲われた。マイクで拡声された自分の艶声に真っ赤になりつつも、女教師はすぐに演説を再開させた。彩花の陰唇と二人の少年の唇による、涎を巻き散らしながらの、激しいディープキスが続いている。狂ったように身体をくねらす憑依体は、あられもない艶声を上げ続けている。

佐由理は舞台上から全学園生徒を見渡した。まだ八神以外には誰も、異変には気づいていないようだ。女教師が玉のような汗をかき、少女のように頬を染めていることも、遠目ではわかりにくいのだろう。だが、硬く膨らんだ乳首はブラジャーのレース地に敏感な身をこすりたてて躍動し、シヨーツは太腿に蜜が垂れそうなほど濡れている。演壇の下では、タイトスカートから伸びた美脚が、気弱そうな内股でカタカタと震えている。

全学園生徒が視姦する中で文字通り全身を嬲られながら、それでも平然と演説を続けなくてはならない羞恥責めに、佐由理はいまにも逃げ出したいようになってきた。それでも、生徒の集団から鳶色の不敵な眼光を見だし、女教師は演壇上で両拳を握って羞恥に耐えた。

「……とのこ……とで、同じなのです。……ようするに……」

佐由理の声が止まった。背筋がサーと冷えていく。ついに彩花の狭かった膣口が熟れ開き、愛液がぐぼりと垂れ落ちたのだ。男を迎え入れる準備ができてしまったわけだ。

波が引くように少年たちの手が離れ、後ろ手を拘束していた鎖が少し下ろされた。上半身を水平にして尻を後ろへ突き出した格好にされる。佐由理はヒッと叫びそうになった。彩花の背後にいた少年が、ズボンのベルトを外しているのだ。ぬるりと現れた男根は、大きくはないものの、若々しく急角度でそそり立っている。愛してもいない男の肉根など、身の毛もよだつほど醜悪なだけだ。

突然、演説の声が止まったため、生徒たちの視線が佐由理に集中した。そのときになって初めて、生徒たちは美人教師の顔色の悪さに気づいた。体育館がざわめく。

佐由理はこのままではまずいと思い、迫りくる現実に逃避するように演説を再開させた。ハの字に拘束された彩花の太腿が後ろへ抱き寄せられた。花開いた陰唇に亀頭が触れる。

「……のようときこそ、教師のみならず生徒全員が一丸となつて……」

佐由理の演説に異様な熱がこもった。それが逃避のための呪文であるように、彼女は必死なまでに話を続けた。亀頭が膣口に頭を埋める。処女膜が圧迫される。

「……なにが原因だったのかをよく見極め、考えなくてはなりません。つまり……」

佐由理は内心で悲叫した。狭い膣内を拡張しつつ、男根がゆっくりと前進してくる。亀頭に押された処女膜が張りつめる。あっけないほど簡単に、ブツンと膜が切れた。

「……いた……い……」

羞恥のつぶやきを体育館中に響かせ、佐由理は舞台上で顔をしかめた。蜜壺をとるところにされたうえでの開通だったため、実際にはあまり痛みはなかった。だが、身を襲うショックが胎内の痛みを何倍にも増幅させていた。本来、女性が人生の中で一度だけ受ける痛みを、これで二度も味わわされてしまったのだ。しかも、全学園生徒が見守る中でだ。

裂けた処女膜をこすりたてながら、男根が突き入れられていく。無理矢理拡張されていく彩花の膣道が、最愛の者を迎えるように潤滑液を湧きたたせ始める。

見知らぬ少年に処女を散らされ、幼い膣口を拡張されていくあまりのおぞましさに、佐由理は全身が総毛立った。演壇の下では、膝が滑稽なほどカクカクと揺れている。

またも演説を止めてしまった黒髪の女教師を見て、再度、体育館がざわめきだした。

佐由理は涙の膜が覆った漆色の瞳をわななかせ、恐る恐る生徒たちを見渡した。生徒たちは彼女がよほど体調が悪いと思ったのか、みな心から心配そうに女教師を見ている。

憐憫の眼差しが肌に突き刺さってくる。佐由理は止めどないほどの羞恥を感じた。

ついに男根が根本まで埋まり、ゆっくりと前後動が始まった。充血した内壁をこすられる激痛と快感が、混濁した濁流となって美人教師の身体を襲う。

佐由理は真つ赤な顔を振って話を再開したが、もはや最初の冷静さは取り戻せなかった。次第に息継ぎが多くなり、沈黙も長くなっていく。さらには、言葉の端々に甘え口調の嬌

声が混じり出す。生徒たちのざわめきが増し、女教師はますます恥ずかしくなっていく。さんざん彩花の蜜壺を追い立てたのち、男根が抜かれた。白い逆りが背中に放たれる。生臭く熱い不浄な液体をかけられて、おぞけだっている余裕はなかった。すぐさま二本目の怒張が、涎を垂らす彩花の陰唇に突きこまれた。先ほどより大きい肉塊だ。肉壺内部を探索するように、亀頭がやさしくも暴れ回る。彩花の激痛を快感で埋め尽くしてしまうほどの手練を發揮し終わると、膝を覆うニーソックスに出して絶える。

三番目の男根はさらに立派なものだった。こちらは一息で最深部の子宮口まで到達する突きこみを見せ、最初から全速でグポグポと前後動を開始した。彩花の乳房が暴れ回る。

『……ひうつ、ひうつ！　だ、だめえ！　せ、せめてもう少し、ゆつくりしてえ……』

『後がつかえてるんだぜ先生。ゆるめてほしかったら、こっちの口でも相手してくれよ』

彩花の鼻先にいきり立った男根が差し出された。口でする行為は一条家令嬢である佐由理ですら知っている。だが、そんな不浄な行為を行ったことがあるはずもなかった。にもかかわらず、少年は先走り液がにじむ亀頭を彩花の唇につけてしまった。生臭い液体が、口紅を塗るように上下の唇へまんべんなく塗られていく。鼻をつく悪臭と、唇に触れる亀頭の熱く硬いおぞましい感触に、佐由理は戦慄した。

だが、憑依体の衰弱した身体では、抵抗できるはずもなかった。ぐぼりと唇が割り開かれ、喉奥深くまで亀頭を突きこまれた。前後左右にじゅぶじゅぶと男根による口内の蹂躪



が始まる。尿道から苦臭い醜悪な液体が次々に湧き出してきて、佐由理は気が狂いそうになった。口内が唾液と男汁で一杯になったが、とても飲みこむ気にはなれず、肉響をされた口端から愛液のようにだらだらと垂らすしかなかった。鼻腔に充滿する男のすえた臭い。周囲でしごきたてられている無数の男根。もうなにも考えられない。

『おらおら、先生よお！ もっと、気合い入れて舌動かさねえと、ゆるめてやらねえぞ！』朦朧としていた佐由理は、言われるがままに舌を伸ばした。とたんに、ガサリと体育館中にノイズが響いた。黒髪の女教師はハッと我に返った。本体と憑依体の意識が混濁していたせいで間違えて、なんと目の前のマイクに舌をはわせてしまったのだ。

体育館がしんとなり、上気していた佐由理の身体が冷えた。生徒たちのざわめきが波のように沸きたっていく。マイクの表面にあたっていた舌先を引っこめ、美貌の女教師は真っ赤な顔をおずおずと上げた。生徒の無数の視線が突き刺さってくる。羞恥が爆発する。

「……あの……その……うああんっ！」

ごまかそうと口を開いたとたん、嬌声がこぼれた。もうだめだ。一言でも発しようものなら、恥ずかしい声が漏れてしまう。佐由理は両手で唇を押さえた。はやく、なにかごまかさないと。気ばかりが焦り、時間がすぎていく。ぐにやりと日常の風景が歪み出す。

佐由理は長い睫を上げ、物欲しそうに潤む瞳で全学園生徒を見回した。みんなが見ている。前後の口で男根を受け入れ、はしたなく愛液を飛ばして悶え狂う女教師を見ている。

蜜壺の激痛すら麻痺するほど佐由理の官能が膨らんでいく。彩花の身体が男根による初めての高みへと昇り始める。演壇の下では、女教師の膝が折れそうに震え、男根の突き上げと同期して腰がガクガクと前後に振れてしまう。全学園生徒が注視する中、裸に剥かれた錯覚がした。膨らんだ乳首を、どろどろに蜜をこぼす陰唇を、全身の白い肌を無数の熱い視線が焼き尽くしていく。佐由理のすべての意識が白濁した。

『……ふあああああああああつー！』

彩花が声高に達し、同時に、女教師の身体が全学園生徒の視線に責められただけで達してしまった。憑依体が気絶してしまい、佐由理の膝がすくと落ちた。生徒の悲鳴が上がる。艶やかな黒髪を舞台に広げて倒れた美貌の教師は、四方から降りそそぐ生臭い精液を、うなじに、背中に、尻に、太腿に感じながら、ゆっくりと氣を失っていった。

※

白い天井が見える。ぼんやりと佐由理は目を覚ました。

保健室のベッドの上だ。身じろぎしてみると、掛けられた布団の中は服を着たままなのが知覚できた。いつの間にかこんなところで寝てしまったのだろう。佐由理はころんと横に寝返りをうったところで……短く悲鳴を上げた。ベッド横の椅子に八神が座っていたのだ。楽しそうな笑みを浮かべた八神が、椅子から鳶色の瞳で見下ろしている。佐由理は一瞬で、体育館での羞恥責めを思い出した。挙げ句には達して、気絶してしまったことも。

第六章 崩壊

佐由理はトイレとシャワーをすませ、ブラウスにタイトスカートという教師本来の姿に戻った。もちろん、服も下着も新しいものに替えたが、やはり気分は癒されなかった。

この学園の化学室は、樹木に囲まれるようにして校舎の外れにある。最後の授業で八神がどんな責めをするのかは定かでないが、少々の騒ぎくらい覆い隠されてしまおうだろう。

佐由理は死刑囚の足取りで、八神に許された二十分遅れギリギリで化学室へ入った。

女教師が扉を開けたとたん、教室がしんとまった。佐由理は助けを求めるように室内を見渡したが、やはり阿久津はいなかった。ひよっとしたら、もう帰ってしまったのかも知れない。目が合ったほとんどの生徒が、気まずそうに視線をそらすのが耐えきれなかった。美貌の教師は、泣き出したほど恥ずかしくなったが、唇を噛みしめて授業を開始した。

※

あのあと、猛烈に排泄させられて気絶して以降、憑依体への責めは行われていない。

それなのに、佐由理の心身にはびこった淫熱がまったく引かないのだ。乳首が膨らみ、ショーツが湿る。教科書を読む声すべてが、もう雄を求める艶声にしか聞こえない。美貌の教師は恥ずかしがりながらも、媚びる声のままに授業を続けた。

とにかく、この授業を終わらせよう。そうすれば、彩花は解放され、彼女の忌まわしい記憶も消してもらえるのだ。そのあとで、なんとしてでも八神を警察へ突き出そう。

淫鬱の中に希望を見いだそうとしていた佐由理の視界に、野太い両足が歩んできた。うつむいていた顔を上向かせると、加納の巨体があった。四角い顔が赤らんでいる。

「……どうしたの加納君。席に戻りなさい……」

佐由理の声が、「ひううっ！」というあられもない嬌声に途切れた。なんと、加納の巨大な手のひらが、女教師の膨満な胸を鷲づかみにしてきたのだ。

「……ちっ、やっぱり、立ってやがる」

さすがの佐由理も気が動転した。胸に食いこむ手を払おうともがいたが、加納にか細い両手首を頭の上でまとめ握られ、背後の黒板に押しつけられてしまう。

「ちよっ、ちよっど加納君！ やめなさい！ どうしたの？」

あまりにも異常な行動だった。いくら加納が粗暴な性格をしているといっても、ここは教室であり、いまは授業をしている真つ最中なのだ。それに、新任当初と比べると、彼ともずいぶんわかりあえてきたと佐由理は思っていたのに。加納が赤ら顔を後ろへ向けた。

「構わねえだろ八神！ お前が先生になにしてんのか知らねえけど、もう限界なんだよ！」

「ああ。好きにしなよ」

そう冷たく笑った八神の瞳に、微かな紫色が灯っているのを佐由理は見逃さなかった。

「——八神君！ 加納君に、なにをしたの！」

美人教師の震えた叫びに、八神が平然と伝心で答えてきた。

「ふふっ。別に大したことじゃないよ。この教室にいる全員の理性を、能力で少しだけ麻痺させただけだよ。記憶を選んで消去することに比べたら、簡単な技さ」

「——そんな……。ひどすぎる……！」

「なに言ってるんだよ。普段なら、なんの影響も出ない程度にしか麻痺させてないよ。その証拠に、加納も先生をいきなり押し倒したりしてないし、他の男子も押しかけてきてないだろ？ つまり、それでも加納を暴走させるほど、先生が淫乱に誘っちゃったんだよ」

「……そ……んな。こんなふうになってるのは、八神君の……くあああつ！」

佐由理の思考が途切れた。加納の手が、無防備になつた右胸をキュと揉み上げたのだ。

「……ふ、あああつ……や、やめなさ……い、加納君……正気に戻って！」

加納を引き剥がそうとしたが、淫熱にやられた身体にはもはや力が入らず、頭上でまじめ握られた細指を空しくもがかせることしかできなかった。加納の顔が微妙な色を帯びた。

「なんだよ、その力は。まるつきり普通の女じゃねえかよ。特殊能力はどうしたんだよ！」

悲哀と失望が入り交じった顔を向けられて佐由理は辛くなつた。と、空いていた左胸も別の手にぐちゅると潰された。快感と驚愕に顎を上向かせると、神谷の長身があつた。

「ふあああつ……か、神谷君……まで？ だめ……二人ともやめて！」

「……ちょっと！ 二人ともやりすぎだよ！ 佐由理先生が可愛いそうだよ！」

立ち上がった七海も理性が麻痺しているのか、頬を染めている。八神が冷声を重ねた。

「七海。それから他の女子も、黙って座って見てなよ。佐由理先生が本当に嫌なら、二人の男くらい簡単に振り払えるさ。逆に、逃げないってことは嫌じゃないからだだよ。先生、もの凄いい美人だけど恋人いないみたいだからね。ようするに身体が寂しいんだろ？」

「……そ……んな、違う……」

「無理するなよ、先生。そろそろ、みんなに犯してほしいんだろ？ 教師だから口に出せないって言うなら、行動で答えてくれればいいよ。嫌なら手を振り払って逃げればいいし、そのまま虐められたかったらその場でひざまずいてくれればいい」

ひざまずく。つまり膝を落としてしまったら『肯定』の意味にとるというのだ。

佐由理の驚つかまれた乳房が、動揺に高鳴る鼓動を伝えて滑稽なほど上下を始める。

七海は八神を一瞥してから、女教師にすまなそうな顔を向けて座ってしまった。

「……ああ……」

佐由理は真っ赤な美貌を振り、絶望のうめきを上げた。こうして乳房をさわられているだけで、膝が歡喜にカタカタと揺れているのだ。もはや、耐えきえることは不可能だ。

ついに、ぐちゃぐちゃと左右の揉み上げが開始された。女教師は墮ちる確信をした。

※

佐由理は氣絶していた憑依体の臉を上げた。場所を移そうというのか、停車したライトバンの後部座席に横たえられている。全裸だが拘束具が外されており、白いシャツがかけられていた。もう、こちらの身体で活路を見いだすしかない。身じろぎしてみたが、衰弱した身体はのろのろとしか動かせない。身体に染みこんだ雄臭が、思考と子宮をとろけさせる。また一匹の雌に戻ってしまう。と、少年の一人が同じ後部座席に、服を着て座っているのに気づいた。そのズボンの膨らみを見つけて、憑依体はこくりと喉を鳴らした。

※

女教師が二人の搾乳になす術もなく悶え震え、ズルズルと腰を落としていくと、女子生徒たちの悲観に満ちたため息が広がった。ぺたりと尻餅をついた佐由理の股間を、加納が片手でぐちゆりと驚づかみにした。股間から脳天まで快感が走り、腰で黒髪が震えた。

「……いやああっ！ だ……め……加納君！」

「おいおい。グシヨグシヨじゃねえかよ、先生。待ってなよ、いま虐めてやるからな」

加納が驚づかんだままの恥丘で女教師の身体を持ち上げた。シヨーツが陰唇に食いこむ。「……くあああつ！ ……くつ！ は、放して……だ、だめなのお！」

股間に全体重がかかって蜜壺が潰され、佐由理は恥も外聞もなく、加納の野太い腕にすがりついた。陰唇抱きのまま、化学室特有のベッドサイズはある教卓に運ばれてしまう。教卓に膝立ちで着地したところで、八方から伸びてきた腕に、全身を固められてしまっ

「……でけえくせに、あきれろくらい綺麗な胸だな」

いくら芸術的な美巨乳でも、佐由理にはコンプレックスになっている胸だ。自らの、はしたなくも熟れ育ちすぎた恥部を、慣れ親しんだ生徒たちに視姦される恥ずかしさで、黒髪の女教師は、美貌ばかりか上半身全体をうつすらと朱に染めてうつむいてしまった。壊れてしまいそうに繊細な両膨らみが、唐突に背後からキュッとつかまれた。まさに愛撫ともいえるやさしい握りに、子宮がとくと脈を打つ。反動で上向かせた子顔で、背後の生徒を見た瞬間、佐由理は絶望的な思いがした。漆色の瞳を困惑で潤ませてしまう。

「……ああっ。長瀬君まで、どうして……」

佐由理が、阿久津の次に信頼していた男子生徒、長瀬が美巨乳をつかんでいた。八神に理性を麻痺させられた影響で、ついに彼までもが美人教師の艶姿に狂ってしまったのだ。

長髪の男子生徒に普段の笑顔はなく、先ほどの加納と同じく微妙な表情をしていた。

「……佐由理先生さあ。いま自分がどれほど色っぽい顔してるのか、知らねーだろ？ そんな顔で喘がれたら、どんな男だって狂っちゃまうよ」

言う間に長瀬の指が、たぶんと膨らみを持ち上げ、上下左右にとやさしくも執拗に搾乳を始めた。とたんに背筋がびくびくとのけぞり、より一層、長瀬の指に胸を委ねてしまう。阿久津や七海レベルの手練な責めに、真っ赤な美貌を振り乱しながらも、驚いた。

「……ふううっ……ふあっ……な、長瀬君……胸……そんなにし……たらだめ……」

「うまいもんだろ？ 俺、意外と年上にもてるからさ。色々と教えこまれてんだよ」

乳房と子宮が同化してしまった錯覚がする。搾乳の一揉みごとに胎内が練り合わされ、蜜壺にじゅくじゅくと蜜が送りこまれていく。熟れ膨らんだ桃色の美乳首を、クシユクシユと上下にしごかれ始めた瞬間、佐由理はついにもならない艶声を上げてしまった。

「……………くやあああつ！ ち……………くび……………やあつ……………だめつ……………だめなのお……………！」

その声が合図だったかのように、加納以外の八人の手が美巨乳を覆い尽くした。神谷の両手が乳房を抱き上げ、胸の下部を揉み上げる。掲げ上げられた膨らみを、四人の手がぐしゃぐしゃにこね回し始め、長瀬が淡い乳輪ごと乳首を鷲つかみにしてしごきたてていく。

「ふやあつ！ 長瀬君、神谷君……………佐倉君、清水君、南君も岸君もお！ 胸やめてよお！」
猛搾乳を増幅させるように、谷間を上下に揺すられる。両脇までもが揉みくすぐられる。

「ひやああああつ！ 辻君、胸ゆすらないでえ！ 野宮君も脇の下、くすぐりたいのお！」

豊満な美巨乳に蠢く指をびっしりと張りつかせ、黒髪の教師は狂ったように身をのけぞらせた。ただでさえ敏感すぎる乳房を極限まで蹂躪される行為に、佐由理は気が狂わんばかりに追い詰められたが、まだ責めは序の口だ。加納がショーツの尻側をつかんだ。

「——か、加納君！ それだ……………けはだめえ……………脱……………がさ……………ないで……………！」

「へっ、じゃあ脱がさねえで虐めてやるからよ。脱がしてほしくなったら言えよ？」

言うなり加納が、タイトスカートの前後に手を潜りこませ、ショーツを紐状にしてしま

つた。その紐ショーツをぐちゅると陰唇に食いこませる。佐由理の骨髄に電流が走った。「くやあああああつ！ か、加納君！ そんなに、食いこませないでえ！」

そのまま加納が、前後に激しく紐ショーツをこすりたて始めた。ぐちゃぐちゃと粘着音が鳴るたびに、レース地の中で陰核が剥かれ、弄ばれる。佐由理の理性が吹き飛んだ。

「いやあああああつ！ そ、そんな……こすらないで……こすらないでえ！」

無数の蠢く指に覆われた乳房を振り乱し、美人教師が黒髪を振り乱した。

「なんだよ。脱がさねえで虐めてやってんじゃねえかよ。それとも脱がしてほしいか？」

「止め……止めてえ！ 中でこすれてるのお、速すぎるのお！」

「先生だろ？ はつきり答えろよ。このまま脱がされずに虐められ続けたいのかよ」

より苛烈にショーツが食いこんできた。佐由理の身体が浮き、蜜液がごぼりと落ちる。

「いやあああああつ！ 脱がしてもい……いから、これやめて……だめなお！」

「へっ、遠慮すんなよ先生。脱がされたくねえんだろ？ このまま虐めてやるよ」

加納が剛腕の間で佐由理の腰を、お手玉のように素早く前後に振り動かし始めた。

「ひうっ、ひうううっ！ 脱が……脱がしてえ！ お願いだから、これ脱がしてえ！」

もう佐由理には、恥も外聞も関係なかった。加納が楽しそうに笑った。

「はは。最初からそう言やあいんだよ」

ようやく加納の手が止まった。もはや白い布は陰唇へ完全に食いこみ隠れており、蜜壺

が壊れたように蜜液がポタポタと落ち、教卓に水溜まりを作っている。女教師の浮いた両膝が下ろされて淫惨な股吊りから解放されると同時に、乳房の責めも中断された。

荒い息をついてぐったりと四つんばいになってしまった佐由理の尻から、卵の殻を剥くようにぬるりとショーツがはぎ取られると、女子たちの憐憫に満ちたため息が広がった。

ついに美貌の教師は、タイトスカートと靴だけの姿にされてしまった。

ショーツが脱がされるとともに羞恥心が戻ってきて、佐由理は泣き出したくなった。生徒たちにこんな屈辱的な仕打ちを受けているというのに、拒絶することすらできないのだ。

今日一日いたぶられ続けた敏感な身体は、もはやどんな凄惨な愛撫にも好意的に反応してしまう。子宮が嬉々として躍動し、蜜壺が雄を求めてはしたなく涎を垂らしてしまう。

ついに、憑依体と同じく、責めを感じて喘ぐだけの肉人形に墮とされてしまったことを悟って、黒髪の教師は唇を噛んだ。

※

佐由理は休む間もなく、仰向けに教卓へ押さえつけられた。両手を横に伸ばして、女子が座る側に両足を向けた格好だ。たぷりと広がった美巨乳を、再び七人の手が覆い尽くす。

「ふやあああああああつ！ みんなもう、胸、採まないで！ やなのお！」

再び始まった猛搾乳の下では、女教師の両足が加納と神谷によって開かれ出した。普通の開脚ではない。ピンと伸ばされた両足が教卓についたまま、扇状に左右へ開かれていく

のだ。加納が楽しそうに言った。

「先生、武道やってんなら身体柔らかいだろう？ 股割り見せてもらうぜ？」

股割り。回し蹴りを放つために、股関節を極端に広げる柔軟のことだ。佐由理も股割りは一八〇度近くできる。ふいに加納の思惑がわかり、女教師の全身が羞恥で震えた。

「いやああ！ そんなのだめえ！ 加納君、神谷君、やめてえ！」

佐由理は渾身の力で足を閉じようとしたが、七人がかりで乳房を揉まれている影響で、太腿にはまるで力が入らない。みるみる両足が広げられていき、開脚角度が九〇度も超えたところで、張りつめていたタイトスカートが一気に腰側にまくれた。

「いやああああああああつ！ 見ないでえええええつ！」

ぬめり光る恥丘の全貌が露わになった。またも、教室がざわめく。

佐由理の秘部は恥毛が薄く、熟しきった肉花が淫猥なほど丸見えになっていた。ひくつく陰唇は幾重にも肉ひだが外へめくれて折り重なり、朱色の大輪を咲かせている。陰核は中味が半分ちろりと顔を出しており、雄を恋いこがれているのか、肉花全体が咀嚼するようにくちやくちやくと蠢いている。とたんに、熟れた雌の匂いがむわつと湧きたった。

「はっ。こっちはまた、すげえ淫乱作りだな。令嬢の持ち物とは思えねえぜ」

「……言わないで……加納君！ そこ、いやらしい形だから恥ずかしいのお！」

「見てみるよ、先生。女子たちも、先生の持ち物があんまり淫乱なんで驚いてるぜ？」

佐由理は朱色の顔を起こして、恐る恐る女子たちを見た。女子生徒の理性も麻痺しているのだ。みなが惚けた顔で、魅入られたように美人教師の淫猥な秘部を注視していた。

「……や……あああ！ みんな……先生のこんなところ、見ないで……見ないでえ！」

羞恥で上体を起こそうとしたために、蠢く無数の手へさらに乳房を押しつけてしまう。

「うやあああああ！ 胸……胸！ もう揉……まないでよお！」

ついに佐由理の太腿が引きつり、一五〇度ほど大開脚したところで動かなくなった。

「くあつ……い……痛い。……それ以上足……広げ……ないでえ……痛いのお！」

「へへ、すげえ格好だな。ちゃんとマッサージして、限界まで広げてやるから安心しなよ」
加納と神谷が空いた手で、女教師の張りつめた左右の内股筋肉を揉みさすり始めた。とたんに、佐由理の背筋に電流が走り、蜜壺がぐちゅると鳴った。まるで内股に官能波が溜まっていたかのように、太腿から股間へと熱が濁流となつて這い上がっていく。

「いやああつ……二人とも足揉まないで……変になつちやう……やつ、胸もやめ……！」

「もう我慢できねえんだろ？ まつすぐに広がったら、ご褒美に俺のを入れてやるからな」
加納がズボンの前を開けているのを見て、佐由理は動揺した。逃げるように向いた横の男子も、ベルトを外していた。周囲でカチャカチャと音が響き、次々にいきり立った男根が差し出される。つんとした精臭が鼻につき、一気に美貌の教師は心細くなった。

「……やつ……やあつ……みんな……そんなの……だめえ……」

そして、加納のものを見たとき女教師は怖気立った。今日見て味わった、どの男根よりも巨大な代物だったのだ。太い血管が浮かんだ茎は野太く、根本へいくにつれ大樹の様に膨らんでいる。亀頭もグロテスクに大きく、茎に取ってつけたように、カリ部分の段差が激しい。あんなものを入れられてしまったら、佐由理のものが壊れてしまうかもしれない。「……か、加納君……そんなの無理よお……」

「それだけ、グチヨグチヨになってりゃあ入るだろ。ゆっくり入れてやるから安心しなよ」美貌の女教師は、助けを求めるように七海たちを見て後悔した。女子全員が、憐憫と興味と興奮を宿した眼差しを送っていたのだ。もうすでに、教師を見る目ではなかった。教室の最後部に座った八神は、にやにやと笑って見物しているだけで動く気配はない。

ふいに、泣きたくなった。もはや誰も、佐由理を教師として見てくれないのだ。さらに開脚角度が広がり、子宮がキュッと潰されると、佐由理は高みへの階段に足をかけてしまった。股関節の痛みがくると快感に変わり、細腰が上下に動き出す。ピキリと音をたてて、ついに両足が一八〇度まで広げられた。大の字どころか土の字の究極の羞恥開脚だ。と、その股関節の振動が子宮最深部をコツンと叩き、ついに達してしまった。

「ひやああああああああああつー！」

真っ平らに伸ばされた陰唇が、赤い肉をごぷりと開いた。蜜液が噴き出し、机に液溜まりが広がり出したところ——、いきなり佐由理の中心になにかがめりこんできた。

「くああああああつー！」

美貌を上げて、佐由理は悲観に暮れた。陰唇に加納の亀頭がすでに半分ほど埋まっていたのだ。メリメリと肉塊が押し進められ、亀頭の断面に沿って膣口が拡張されていく。

「だめえ……加納君！ 抜きなさい！ やああつー！ 抜いて……お願い、抜いてえ！」

膣口を無理矢理広げられているというのに、佐由理はほとんど痛みを感じなかった。それどころか、ピキピキと肉口径が広がるごとに子宮が快感に踊り、次々に蜜液がわき出てくる。ついには陰唇が、男根を進んで迎えようと勝手にめくり裏返り、亀頭を包みこんだ。

「あつ……だめつ……だめええ！ くああつ……勝手に飲みこんじゃうう！」

つぶりと蜜壺に亀頭部がすべて潜りこむと、土の字にされた股全体が歓喜に震えた。

「ふああああああ！ い……い……のお……これ……あつ……心が壊れちゃ……う」

埋没した亀頭が狭い膣道を八方に開拓していく。野太い茎がさらに膣口を拡張していく。

「やあつ、加納君もう止めてえ……これ以上広げられると、先生おかしく……なっちゃう」

「遠慮なく、おかしくなれよ。……くつ。つうか、なんで中がこんなザラザラしてんだよ

滅茶苦茶狭いうえに、肉がうねってやがるし。ちっ、こんなの教師の持ち物じゃねえぞ」

ついに、ぐちゆりと根本まで突きこまれてしまった。佐由理のすべてが飛翔する。

「ふやああああああつー！」

「なんだよ、先生。入れただけでイッチまいやがったのかよ。じゃ、動かすぜ？」

加納が腰を引いた。カリ部分がひだ状の肉壁をえぐりつつ出ていき、ぬぷりと絡まった肉に引かれて股がさらに広がるとする。肉茎と亀頭の接合部のくぼみが、ぷちゅると膣口に収まったところで、腰が再び押し進められ、肉壺の拡張劇が再演される。

「んあぁっー！ か、加納君！ だめえ、動かないで。狂っちゃう……狂っちゃうのお！」
「へっ、じゃあ止めてやるから、他のみんなにも奉仕しろよ。どうやら先生は、すげえ名器持ちみてえだからな。動いてばかりいたら、こっちがもたねえ。ほら、起こしてやるよ」
加納は佐由理の身体を、搾乳していた手の波から引き剥がすように抱き寄せ、開脚騎乗位にした。女教師の膣口が肉茎に沿ってさらに拡張され、蜜壺が凶悪な肉塊に満たされる。
「うやあぁあぁっー！ か、加納君、だめえ、広がるう！ 奥まで入っちゃうのお！」
佐由理は生徒の腰の上で、はしたなく美乳を振り乱し、涙がこぼれるほど瞳を潤ませた。

※

嵐のような搾乳が終わったことにより、理性と羞恥心が戻ってきた佐由理だったが、加納の命令通りにするしかなかった。なんといつてもまだ、一八〇度の羞恥開脚をして、巨根の上に腰を下ろしたままなのだ。加納に少しでも動かされただけで、理性を丸ごとそぎ取られ、あられもない痴態を見せてしまうことは、すでに身体で教えこまされている。

開脚騎乗位で静止している佐由理の鼻先に、神谷のむっと臭い立つ男根が差し出された。「じゃあ、さっそくこいつを胸でこすってもらおうか。やりかたくらい知ってんだろ？」

こんな美巨乳をしている佐由理だ。当然、その行為も知っていた。二度目の恋人に何度かセがまれたことがあったが、ついに恥ずかしくてできなかつた行為だ。それを、女子に視姦され、開脚騎乗位で生徒に突かれている中、自ら教え子にしなくてはならないのだ。

佐由理は逃げ出したくなつたが、加納の肉塊が蜜壺の中で凶暴に脈を打っているのを感じると、抵抗する意思まで消え失せてしまう。

黒髪の教師は、長身の男子生徒に指示されるがままにふるまつた。両脇を締め、自らの豊満な乳房を横から抱え持ち、先走り液にぬめる男根を挟む。膨らみを自ら中央に圧迫させ、快感に喘ぎながらも、上半身を上下に動かして筋張つた肉茎をこすりたてていく。胸の谷間からくちやくちやくと顔を出す醜悪な龟头を、口内に迎え入れ、あるいは腐臭を放つ男汁を尿口にまで舌を突き入れて舐め取っていく。

だが、佐由理の敏感すぎる乳房は、男根をこすりたてる擦感すらも、耐え難い快感として受け取ってしまうのだ。ヒクヒクと細腰が震えるたびに、蜜壺がさらに潤み出す。そしてなにより、自ら乳房を上下させているためにどうしても加納の腰に、伸びきつた陰唇をペチペチと打ちつけてしまうのだ。少しの動きが、肉塊が充填された蜜壺内では、ひだ粘膜をえぐり回す陵辱劇になってしまう。口元で蠢く龟头の汁腐臭に、思考が麻痺していく。官能の波に翻弄された美貌の教師は、何度も身体が動かせなくなり、神谷の男根に、陰毛に、陰囊に、はしたなく頬をあずけて荒い息をついてしまう。そして、少しでも休もう

ものなら、加納の容赦のない突き上げで泣き狂わされ、再び奉仕を続けさせられる。

ぬめる亀頭をつぶりと口中に含んだまま脱力した佐由理を、すぐさま加納の巨根がぐしゅぐしゅと叩き起こした。美貌の教師は、唇に透明な糸を粘つかせて叫んだ。

「むぶあつ！ むやあつ……加納君、止めてええつ！ すぐ、神谷君に胸するからあ！」
「ちっ、まどろっこしいや。オレが動いてやるから、先生は胸だけ持っとけよ」

その神谷の声が、新たな陵辱劇の幕開けだった。佐由理の手で押さえ潰された乳房の谷間を、神谷のぬめる男根が激しく上下にこすりたてる。桃尻に見間違えるほどの豊乳を下から何度も貫き、開きっぱなしになった唇へ、男汁の滴る亀頭をグシユグシユと突きこむ。

「うぶつ……うやああつ！ んむつ、ふぶつ、んぶううんうー！」

女教師の締めた両脇へ、焦らされた二本の男根が背後からぬぷりと突きこまれる。

「——んうんっ！ 岸君、南君、んぶつ、脇だめえ！ んむうつ、くすぐったいのお！」

佐由理の背筋がひくつき、両脇からクシユクシユと腐汁にまみれた亀頭が顔を出す。

両乳房の外側から、さらに二本のしごかれ続ける男根が押しつけられ、豊満な肉枕を中央へ押しつぶす。上下運動を続ける神谷と左右の亀頭が、肉流動体ごしにせめぎ合う。

「あつ、あつ、辻君も佐藤君もお！ 胸、そんなに……ふあぶつ……しないでお！」

余った二つの男根は、左右から美人教師のうなじに潜りこみ、艶やかな黒髪を亀頭でかき上げていく。先走り液を頭皮にこすりつけながら、何度も何度も髪をすき上げていく。

「いやあああああー！ 清水君、野宮君！ 髪だけは、髪だけはやめてえ！」

口端から涎と男汁を垂らして悶え震える美貌の教師に、神谷が笑った。

「ほらほら先生、舌が止まつてんぞ。そんなに、加納に突き上げられたいのか？」

とたんに恐怖に駆られ、瞼を閉じて舌をはわせた佐由理は、「ひううう！」と背筋をえび反らせてしまった。なんと神谷が乳房を押し上げ、桃色の両乳首を舌にあてさせたのだ。

「ほら、舌止めんなよ先生。いまからは、オレのものと一緒に自分の乳首も舐め回せよ」

逆らえず女教師は、亀頭と一緒に、持ち上げられた二つの乳首にも舌をはわせ、そのたびに自らを追い詰めて、肉椅子にしている加納の腰をぐっしりと濡らしてしまった。

いきなり肛門に劇感がきて、朦朧と奉仕していた佐由理の意識が覚めた。なんと長瀬が、肉皺に亀頭を半分ほどもねじこませているのだ。直腸がうずき、心が溶けそうになる。

「……う……ああ、長瀬君……？ そこ……そこは、だめなの！」

「先生、ごめん。もう俺、限界だから、こっちに入れさせてもらうわ。でも痙攣してないから、痛くはないんだろ？ まだ使ったことない感じだけど、凄い柔軟だから大丈夫だよ」

長瀬の顔には心苦しきところえきれない欲情とが、ない交ぜになった色が浮かんでいた。

佐由理の肉皺が長瀬の亀頭に沿ってキリキリと拡張されていく。肛虐の快感を覚えこまされた肛門は、初めての挿入だというのに柔軟に男根を迎え、陰唇のように外側へめぐり裏返って亀頭を包みこんでいく。肉茎がずりずりと菊輪を通過し、肉頭が奥へと埋まる。

「う……や……あああ……あああ……！」

ついに、ほとんど痛みもなく、長瀬の男根が根本まで突きこまれてしまった。担当生徒に、身体中を九本の男根で埋め尽くされた瞬間、女教師の理性が完全に崩壊した。

「ふあ……あ、ああ、ああああああー！」

九人の生徒が動き始めた。前から加納が佐由理の尻房を割り握り、後ろから長瀬が陰核の皮を剥く。その状態で、ポートを漕ぐように女教師の腰を前後に揺する。

「うやああああああー！ こす、こすれてるのお！ そんなに動かないでえ！」

腰が前に動くと、巨根に膣口を拡張され、肛門からは亀頭がねぶり抜かれる。腰を後ろに引かれると、長瀬の肉頭が直腸深くに舞い戻り、蜜壺では巨根のかさが膣壁をえぐり出ていく。二人の肉椅子で踊り狂わされる女教師の上半身では、生徒たちが次々に達していく。加納の男根が蠢動し、ぱくりと開いた口内に臭い立つ白濁液を注いでいく。胸を左右から犯していた亀頭も震え、二つの乳首にこんもりと臭液を盛っていく。頭頂部でしごかれていた二本の男根が熱い液を頭皮に噴き出した瞬間、佐由理は半狂乱になった。

「いやあああ！ お願い！ 髪、髪にはかけないでえ！」

振り乱される黒髪に構わず、二人は亀頭をつむじに押しつけ、液をどろりとすりつける。「ほらほら、先生よお。髪に出されたくないかったら、全部口で飲み干してみなよ」

口元に差し出された暴発寸前の二本の亀頭の一つに、佐由理は迷いもなくむしゃぶりつ

いた。口内に入れたとたん、ぶゆくりとはせる。すぐに飲みこんで次の男根へ向かおうとするものの、喉に絡まりむせてしまう。と、焦れた亀頭がまたも頭頂部へつけられる。

どぷりと頭皮に腐液を浴びせられ、佐由理は亀頭をくわえて両手で胸を抱えたまま、放心してしまった。構わず、生徒たちの二条目が次々に頭頂部へかけられる。腐臭を放つ液体が、どろどろと両こめかみを伝って顎にまで達した瞬間、我に返って腐肉を吐いた。

「いやあああああああつあ！ 飲む、飲むからあ！ もう、髪だけは髪だけは！」
「くっ、そろそろいくぞ！」

加納の肉塊が最深部、子宮口を突き上げた状態で激しく蠢動した。びゅくびゅくと胎内にまで灼熱した液汁を放出されたのを感じて、佐由理は心の底まで汚されてしまった気分になった。と、汚辱を感じると共に、胎内を液汁で愛撫された違和感が下腹部で膨らんだ。

「あ、……やだあ……また……いきそう……」

「へっ、遠慮なくいけよ。つうか、令嬢が『イク』なんて言葉、使っていいのかよ？」

「——佐由理先生、ごめん！ 俺も、もうダメだわ」

長瀬が、直腸最深部でびゅくりとはぜた。その振動が、最後の一押しになってしまった。

「長瀬君、だめええ！ ふあああああああ、いっちゃううううううううううー！」

佐由理は、憑依体を通じて教えこまれた絶頂の合図を、声高に発して達してしまった。

「へ、すげえ乱れようだな先生。入れっぱなしにして、回復したらまた虐めてやるからな」



加納が女教師の頭頂部をぐちゃりと撫でた。佐由理はもはや、両手を拘束されているかのように胸を抱き寄せたまま、身を震わせることしかできなかった。その哀れな姿に再び欲情した神谷が、女教師の頭頂部に盛られた白粘液を、シャンプーでも泡立てるように頭皮に擦りこんでいく。それでも佐由理は胸から手を放さず、弱々しくかぶりを振ることしかできなかった。しかし、そんな極限の汚辱感すらも子宮に響き、官能が高まってしまふ。

「……いやああああ……またいつちゃう……こんなことされて……いきたくない」

神谷の洗髪を面白いつつのか、長瀬以外八人の手が、佐由理自慢の黒髪を覆った。頭頂部に幾つもの亀頭をつけ、びゅくびゅくと溶液を追加して、垂れ落ちる腐液を頭皮の隅々まで揉みこんでいく。腰まで届く髪を持ち上げ、髪の毛一本一本まで染毛していく。

そんな髮陵辱を、佐由理は抱きかかえる胸にすがりつくようになり、波が蓄積してしまふ。肉背筋に走り続けている怖気が、次第に子宮まで届くようになり、波が蓄積してしまふ。肉塊に満たされた蜜壺と肉便に膨らんだ直腸が、とくとくと脈を打ち始める。

「ひ……ああああ……いくつ、いくつ！ こんなことされるのに、いつちゃうー！」
生徒の臭い立つ白濁液を自慢の黒髪に感じながら、女教師は何度目かの絶頂に達した。

※

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>